

# On the Image of the Bird in Du Fu's Poetry: How Du Conveyed his Feelings by the Words of "Parrot" and "Wren"

Mayumi TANIGUCHI

## 杜甫の詩における鳥のイメージについて ―「鸚鵡」と「鷓鴣」に託した杜甫の思い―

谷口 眞由実

### はじめに

盛唐を代表する詩人杜甫（七一二―七七〇）は、六朝時代の文学において獲得された詩語や表現技巧を継承し、さらに新たな詩境を切り開いた詩人である。中でも、詩語に対するこだわりは並々ならぬものがある。杜甫詩には、さまざまの鳥に関する表現がみられ、その鳥の表現には矚目の景として詠じられているものもある<sup>(1)</sup>が、そうではないものもかなりあると感ぜられる。すでに高木正一氏の「杜甫の馬・鷹の詩について」<sup>(2)</sup>において、鷹に「自負」や「壮心」を託し、「高い理想と激しい気性気魄が（中略）鷓鴣の最たる鷹の神駿な姿や心意気に強く引きつけられた」<sup>(3)</sup>「時には雄飛の壮心を、ある時には悪をにくむ剛腸を」これに託したと指摘されている。鷹にはそのように猛しい志を投影しているのに対し、ではほかの鸚鵡や鷓鴣などはどうか、という疑問が浮上してくる。今回、鳥に関するイメージを取り上げるのはこの点について考えたいからである。本稿のねらいは、「鷓鴣」「鷓鴣」など鳥に関する語がどのようなイメージで詠じられたのか、そこに杜甫のどのような心情や思いが託されているのかを考察することにある。

杜甫が詩に詠み込んだ鳥に関する語彙は、どれくらいあるのだろうか。鳥、鷹、隼、鴛鴦、鷺、鷓、鴨、黄雀、黄鵠、鳶、鳥、鸚鵡、鷓鴣、鳳凰、鶴と枚挙にいとまがない。

広瀬恭子「杜甫の詩に現れる鳥について」<sup>(3)</sup>によれば、鳥が現れる詩の数は、七百首を越え、鳥の種類は約四十七種という。同論文では、杜甫が鳥を詠じた用例を、年代ごと、季節ごと、表現方法別、描写対象別に取り上げて考察し、「観念的な叙述ではな

く、日常の平凡な出来事、放浪生活での苦難なさまを、鳥に強い感情を託すことによつてうたっている」と指摘している。また、齊藤夕紀「杜甫の鳥を詠じた詩の研究―夔州時代を中心として―」<sup>(4)</sup>（二〇〇九年度卒業論文要旨集）でも、杜甫の詩に鳥が多く現れるとの指摘は共通している。さらに同論文では、「大暦元年（七六六）から二年にかけての夔州時代に鳥が現れる回数が多い」と指摘し、この時期の詩に見える鳥の種類は「鷓・鷓・鷓・雁・鷓鴣」の五種類であり、伝統的な用法を踏まえながらも独自の用法が見られること、鳥は自由に空を飛べるがゆえに、帰郷を望んでいた「杜甫にとつて鳥は羨望の対象」であったと述べている。

両論文において、すでに杜甫に鳥を詠じる詩が多いとの指摘は共通し、また、詠じられた時期についての指摘には、若干の違いがあるものの、凡そ五十一歳から五十五歳（成都時代）、五十六歳から五十九歳（夔州時代から最晩年）に多いと述べられている。後者において、伝統的なイメージを踏まえながらも独自の表現が見られる、とされていることも注目される。

さて、杜甫が生きた唐代において、人々はどうの鳥を認識していたのだろうか。この点について考えるため、次に、唐代に制作された百科全書というべき類書を参照することとしたい。

唐・高祖（李淵）の勅命によって編集された類書（成立六二四年）である歐陽詢らの撰『藝文類聚』<sup>(5)</sup>の卷九十鳥部上・卷九十一鳥部中・卷九十二鳥部下に挙げるのは次の通りである。

卷九十 鳥部上 鳥、鳳、鸞、鴻、鶴（白鶴・黄鵠・玄鵠附）、雉、鷓

卷九十一 鳥部中 孔雀、鸚鵡、青鳥、鷹、鷓、鴨、雞、山雞、鷹、鷓

卷九十二 鳥部下 鳥、鷓、雀、鷺、鳩、鷓、反舌、倉庚、鷓鴣、

啄木、鴛鴦、鷓鴣、鶻、白鷺、鸚鵡、鷓、鵬、精衛、翡翠、服鳥

同じく、玄宗の勅命によって編集された類書（成立七二七年）である唐・徐堅輯『初学記』<sup>6)</sup>の記載は次の通りである。

第三十 鳥部 鳳、鶴、鷹、鳥、鵠、雁、鸚鵡

『芸文類聚』が三十七種（白鶴・黄鵠・玄鵠を含めると四十種）の鳥を挙げるのに対して、『初学記』に挙げる鳥の種類は七種とごく少ない。詩に多く取り上げられる鳥に絞って収集したと推察される。なお、『芸文類聚』巻九十九祥瑞部下には、「鳳皇、鸞、比翼、鳥、雀、鷲、鳩、雉」が、鳥部と別に項目を立てられて所収されていることも興味深い。

唐代になって導入された科擧の進士科の試験では、詩が課された。『芸文類聚』や『初学記』などの類書は、各部ごとに唐までの詩文を記録しており、科擧受験を目指す者や詩を学ぶ者にとっては、信頼のおける参考書であった。

これら類書記載の鳥の種類と比較すると、杜甫の鳥の語彙の豊富さが一層明らかになる。しかも、たとえば「鷓」についてだけでも、杜甫は「白鷓」「鷓鳥」「狎鷓」「春鷓」「寒鷓」「浦鷓」「沙鷓」「輕鷓」と、さまざまな修飾語を付して、独特のニュアンスを帯びた詩語として用いている。このように杜甫が膨大な語彙、とりわけ詩語を使い分けていたことに驚かされる。

このように杜甫の鳥に関する語彙は膨大な数に上る。吉田誠夫「杜甫について―望嶽・胡馬・画鷹の詩―」<sup>7)</sup>では、「画鷹」詩について、清・浦起龍の説を受け、「鷹」という物に自己の姿を投影させて詠じたもの」と解し、「凡鳥を撃つべくやがては飛翔するであろう鷹（すなわち杜甫自身）を語ったもの」と捉えている。若い杜甫が「未来が光輝ある時間であった」と言いうる可能性を詠じた、との指摘が注目される。

「画鷹」が詠じられたのは、開元二十九年杜甫三十歳の時とされ、杜甫はまさに青雲の志を抱いていたのである。

前述の高木正一「杜甫の馬・鷹の詩について」や右の吉田論文において、鷹のイメージについてはすでに論じられているので、

ここでは先行論文を参考にさせていただくに留めることとする。

そこで、本稿では、杜甫の詩に現れる鳥について考える第一歩として、「鸚鵡」「鷓鴣」に絞って考察することとした。なぜこの二種に絞ったのか。今回取り上げる鳥は、鸚鵡のような珍鳥、鷓鴣のような小鳥であり、一見特に共通点があるようには見えないものの、これらの鳥には共通点がある。それは、いずれも杜甫が自身の心象や境涯を託した用例がある点である。これらの鳥をどのようなイメージで詠じているかを読解し、考察することは、ひいては杜甫が自身をどのように捉えていたかを知ることにつながる。杜甫やその詩について考える上で鳥のイメージを考察することは重要であろう。

なお、本稿では詩のテキストとして清・仇兆鰲『杜詩詳註』（中華書局、一九九五年）を用いる（以下、『詳註』と略記）。ただし、一部通行の文字に改めた。また、杜甫の詩の日本語訳には、鈴木虎雄『杜甫全詩集』（日本図書センター、昭和五十三年六月）初版は『統国訳漢文大成』に所収）などの諸本を参考にさせていただいた。

## 第一章 「鸚鵡」

鷹たかや隼はやぶさが猛禽であり、勇猛なイメージを持ち、そこに杜甫が若い頃を中心として、自身の高い理想や激しい志を託していたことは、先述のように先行論文においてすでに指摘されてきた。それに対して、鸚鵡は言葉を話す、真似るといった特性がある。杜甫は鸚鵡にどのようなイメージを付与したのであるか。以下、本章では鸚鵡について考察してゆく。

鸚鵡の特徴としては、羽色の美しさとともに、人間の言葉を真似ることがまず挙げられる。このことから、後述するように、中国の古典では唐代以前から詠じられてきた伝統がある。杜甫も、そのような鸚鵡に興味を感じたであろうことが推測され、「鸚鵡」の用例は、「鸚鵡」という詩題一例を含めて七例ある<sup>8)</sup>。

杜甫の夔州時代代表作「秋興八首」の其の八に、「鸚鵡」が

見える。

秋興八首 其八

昆吾御宿自逶迤

昆吾御宿 自ずから逶迤たり

紫閣峰陰入漢陂

紫閣の峰陰 漢陂に入る

香稻啄餘鸚鵡粒

香稻 啄み餘す 鸚鵡の粒

碧梧棲老鳳凰枝

碧梧 棲み老ゆ 鳳凰の枝

佳人拾翠春相問

佳人 翠を拾ひて 春に相ひ問ひ

仙侶同舟晚更移

仙侶と舟を同じくして 晩に更に移る

綵筆昔曾干氣象

綵筆は昔 曾て氣象を干せしに

白頭吟望苦低垂

白頭 吟望して 低垂に苦しむ

〔詳註〕 卷十七

昆吾や御宿を通り過ぎてゆく道は、その地形のままにくねくねと曲がりくねり、やがて紫閣峰の北側の山容を漢陂湖に映すところに出でくる。その途中には、鸚鵡がついばみ残した芳しい稲がたわわに実り、鳳凰が長く棲んだ青桐の木もあった。私は春にあたり美しい人とうちつれて若草を摘みつつ言葉をかわしたり、仙人のような仲間と一つ舟に乗り込み、夜になっても舟の場所を変えて遊びつづけた。その頃の私の美しい詩文は自然現象にも影響を与えるほどすぐれたものだったが、今は詩を口ずさみつつ都の方を眺めやり、白髪あたまの垂れ下がってくるのをどうしようもない。

この「秋興八首」は、大暦元年（七六六）、杜甫五十五歳の秋、夔州（現在の四川省奉節県）での作である。この年の暮春、杜甫は雲安より長江を下って夔州へと移り、以後二年間ここに住んだ。この詩は、晋の潘岳の「秋興の賦」（秋に感じてその感興を以って作られた賦）を踏まえて秋の感興を詠じたものである。其の八は、杜甫が長安にいた頃、長安近郊の美しい景勝地漢陂湖に気の合う岑参兄弟らと遊んだ折の輝いていた時空を回想し、今の境遇に比している。

首聯の「昆吾」（漢代今の陝西省藍田県の東北にあった）、「御

宿」（前漢の都長安の南の地名）はいずれも長安近郊の地名である。「紫閣峰」は長安の東南にそびえる終南山の一峰であり、「漢陂」は湖の名。かつて天宝十三年（七五四）、遊覧した際の漢陂湖に至る曲がった道途の情景や、湖に紫閣峰の影が映った情景を描いている。<sup>9)</sup>

頷聯は、「香稻」（芳しい稲）・「鸚鵡」、「梧桐」（おおざり。鳳凰が棲む木とされる）・「鳳凰」という華やかなイメージの植物と鳥の詩語の組み合わせで描いている。恐らく鳥のいる現実の情景をもとにしながら、実際の情景そのものを描くのではなく、想像を膨らませて描いたことがうかがわれる。当時世界的な大都市であった唐朝の都長安、その近郊の景勝地の情景を、都の華やかなイメージの延長として、華やかに輝かしい空間として描き出したと考えられる。

「鸚鵡」は、オウムのこと。体軀は、小鶏の大きざぐらい。頭が丸く短く、上嘴は曲がり、下嘴は短小、羽毛は美しく、巧みに人語をまねる。一方、対置される「鳳凰」は想像上の鳥の名で、先述の『芸文類聚』祥瑞部下に記載されていたことからうかがわれるように、聖王の治世に現れるという瑞鳥である。雄を鳳とい、雌を凰という。身に五色の美しいいろどりがあり、鳥類の首長とされる。

頸聯は、かつて杜甫が長安にいた頃（天宝十三年）、漢陂湖で共に遊んだ岑参兄弟を仙人の仲間になぞらえている。「同舟」は、同じ舟に乗り込むことで、『後漢書』卷六十八に見えるつぎの典故をふまえる。郭泰（太）は河南尹の李膺と親交があり、官職を辞して郷里に帰るとき、多くの儒官が車を連ねて見送ったが、郭泰はただ李膺とふたり、同じ舟に乗って川を渡った。このとき、見送りの人々はまるで神仙のようだと称えたという。「神仙」と称された郭泰と李膺に見まがうような岑参兄弟と共に、同じ舟に乗り込んで春の舟遊びに興じ、夜が更けても舟の場所を移して遊んだものと、当時の楽しい思い出を詠じている。

尾聯は、自然にも影響を与えるほどの文才（彩筆）があったにもかかわらず、今や都から遠く離れた異郷の地で老境に差し掛か

った自身の老いと、不如意を見つめる苦しさを詠じて結んでいる。「気象を干す」は、言葉や文学の力によって自然現象に影響を与えること。岑参も盛唐の有名な詩人であり、共に遊んだ希望に溢れていた當時を思い出すにつけて、自身の今の境遇を嘆かざるを得なかったのであろう。

つまり、この詩の中で「鸚鵡」は、まさに天宝年間の長安近郊の華やかな空間を髣髴させる象徴であるとともに、杜甫の若かりし頃の希望に満ちた輝かしい時間の象徴でもある。

唐・鄭処誨撰『明皇雜錄』（唐宋資料筆記叢刊、田廷柱点校、中華書局、一九九四年九月）「逸文」に次の逸話がみえる。嶺南から献上された白鸚鵡が非常に聰明で、言葉をしゃべるために宮中で愛好され、玄宗や楊貴妃から「雪衣女」（雪衣の女）と呼ばれたという。

特に注目されるのは、その鸚鵡に玄宗が近体（唐代に成立した新しい詩形）の詩篇を授けさせたところ、数遍（読むだけ）で詩をそらんじることができた（近代の詞臣の詩篇を以て之に授け令むれば、数遍にして便ち諷誦す可し）と。この逸話は、天下泰平を誇った玄宗治世下（「開元の治」と称される）の朝廷で、異国情緒も相まって、鸚鵡の聰明さが好まれた様子や、当時の優雅で闊達な雰囲気も伝えている。<sup>10)</sup>

次に、杜甫のほかの鸚鵡の例を挙げることにする。

- ① 麝香眠石竹 石竹に眠り  
鸚鵡啄金桃 金桃に啄む

〔山寺〕『詳註』卷七

- ② 醉客霑鸚鵡 醉客 鸚鵡に霑ひ  
佳人指鳳凰 佳人 鳳凰を指にす

〔陪柏中丞觀宴將士二首 其一〕『詳註』卷十八

- ③ 健筆凌鸚鵡 健筆 鸚鵡を凌ぎ  
鉛鋒瑩鸚鵡 鉛鋒 鸚鵡に瑩たり

〔奉贈太常張卿垧二十韻〕『詳註』卷三

- ④ 隴俗輕鸚鵡 隴俗 鸚鵡を輕んず  
原情類鶻鶻 原情 鶻鶻に類す

〔秦州見敕目、薛三璩授司議郎、畢四曜除監察、与二子有故、遠喜遷官、兼述索居凡三十韻〕『詳註』卷八

①は、山中の寺が人気も稀で、荒廃した様子を詠じている。鸚鵡が隴山（陝西省・甘肅省両省の境に位置する山。杜甫がいる秦州は隴山に近い）の産物であったこと（後漢・禰衡の「鸚鵡の賦」に「虞人に隴坻に命ず」とある）から、それにちなんで表現している。この山寺は、秦州東南の麦積山上にある瑞應寺であるとされている（『詳註』引く『玉堂閒話』）。対をなす「麝香」は、麝香鹿のことであり、「石竹」は草の名で、かわらなでしこ。「金桃」は、桃の一種<sup>11)</sup>。目前の荒廃した寺を描くに当たって、いずれも囑目の景ではなく、秦州及び西域に産するとされる珍しく貴重な動植物を想像して詠じたものである。

②の鸚鵡は、オウムガイの貝殻で作った杯であり、対になる「鳳凰」は、ここでは琴に施された鳳凰の装飾をいう。いずれも華やかな宴会の情景を表している。ちなみに、正倉院御物に螺鈿紫檀阮咸があり、その裏面に鸚鵡の意匠が螺鈿で表現されている。

天平勝宝八年（七五六）六月二十一日、聖武天皇の七十七忌に当たるこの日に、光明皇后は、天皇の遺愛の品六百数十点を大仏に献上された。その時に献上された品の中に五弦琵琶とこの阮咸が含まれている。阮咸は、琵琶に似た四弦の楽器で、丸く平らな胴に長い棹をもつ。この阮咸は二面伝わっている。<sup>12)</sup>

右の文は、正倉院御物の阮咸という楽器について述べたものであるが、恐らく唐から伝来したのであろう。そこに、鸚鵡の美しい螺鈿が施されていることが見える。この詩でのオウムガイの杯や鳳凰の装飾の施された琴も、唐代の華やいだ雰囲気も表している。

③は、杜甫が知人張垧の文章の素晴らしさを称えたものである。後漢の禰衡（一七三～一九八）が、黄王から宴席で「鸚鵡の

賦」を即座に作ることを命じられた時、一たび筆を執ると筆を留めることなく、書き終えた後は文字を一字も改めることがなかったという故事（『後漢書』卷八下「張衡傳」）を踏まえている。「鸚鵡を凌ぐ」とは、張衡の文章を褒め称え、張衡を凌駕すると評しているのである。詩を贈った相手の張衡は、玄宗の宰相張説の息子で、玄宗の娘寧親公主の婿である。対を構成する「鸚鵡」は、かいつぶり。この鳥の脂を刀剣を磨くのに使う。ここでは、その脂で磨いた剣先の鋭さに文章の尖鋭さを喩えたもの。

④は、秦州の地で、杜甫が敕目（任官の目次）を見て、かつての親友薛璩と畢曜がそれぞれ司議郎、監察に叙せられたことを知り、旧友の栄耀を喜ぶとともに、自身の寂しい境遇を二人に述べたものである。掲出の句では、隴の地、すなわち秦州では「鸚鵡」が軽んじられていると批判している。鸚鵡とは、「鸚鵡賦」を作った詩人張衡のことを表し、ここでは才能のある杜甫自身を託している。「鸚鵡を軽んず」とは、恐らく、隴の地、すなわち秦州は鸚鵡の産地の一つであり、都でのように鸚鵡が珍重されないことに、杜甫が評価されず不遇であることを喩えていったものである。対をなす「鶴鶴」は、せきれい。この鳥は、普段は野原にいるが、何か困難があると兄弟互いに救い合うという（『詩経』小雅、常棣）。ここでは、二人に対して、そのように自分を推薦してほしいという思いをこめている。以上の鸚鵡四例中、①②では、唐王朝を彩る美しい珍鳥の華やかなイメージで詠じられている。それに対して、③④はいずれも張衡の「鸚鵡の賦」を踏まえた表現である。③では、鸚鵡に文才のある張衡を喩え、また④では自身を託している。④では、自身が文才を抱きながら秦州の地で、才能を評価されることなく、貧窮にあることを表していることが着目される。次に、「鸚鵡」と題する詩（詩題と第一句の鸚鵡とで、二例）についても見ておきたい。

鸚鵡  
鸚鵡含愁思  
鸚鵡 愁思を含み

聰明憶別離  
翠衿渾短尺  
紅嘴漫多知  
未有開籠日  
空殘旧宿枝  
世人憐復損  
何用羽毛奇

聰明 別離を憶ふ  
翠衿 渾て短尺す  
紅嘴 漫りに多く知る  
未だ開籠の日有らず  
空しく残る旧宿の枝  
世人憐れども復た損す  
何ぞ用ひん羽毛の奇なるを

（『詳注』卷十七）

鸚鵡が憂わしいもの思いをしている。聰明で故郷の親しい者たちと別れていることを思っているのだ。  
この鳥はいま翠の襟元の毛がすっかり短くなっており、その紅い嘴はいたずらに知っている言葉が多いだけで役にたっていない。

閉じ込められている籠がいつ開かれるかその日がくるとも思えず、昔宿った故郷の樹の枝は空しくそのまま残っている。  
世人はこの鳥の美しさをかわいがってくれはするが、その羽毛もどうせ損なわれてしまうとすれば、特別綺麗である必要もなさそうに思われる。

この詩は、表面的には、鸚鵡を描いた詠物詩として読むことができる。しかし、その裏面には、才能あるがために捉えられて籠の中に閉じ込められ、故郷を離れて生涯を送りいたずらに憔悴してゆく鸚鵡に、才人が世に評価されず老いさらばえ、埋没して不遇な境遇にある姿を投影していると解することができる。<sup>13)</sup>

さてここで、さらに理解を深めるため、杜甫以前の鸚鵡のイメージについて、主なものを見ておくこととする。  
早くは、漢の戴聖の編とされる『礼記』（曲礼上）に、次のように見える。

鸚鵡は能く言へども飛鳥を離れず。猩猩は能く言へども禽獸を離れず。今、人にして礼無ければ、能く言ふと雖も、

亦禽獸の心ならずや。(鸚鵡は人語を言うことができるが、鳥類を離れず、狸々も人語を言うが、獸類である。そうとすれば、いま人の体はしても礼儀をわきまえねば、その心は鳥獸に類する。)

また、先述の後漢、禰衡「鸚鵡の賦」の序文には次のようにある。

時に黃祖の太子射、賓客大いに会し、鸚鵡を獻する者有り、酒を衡の前に挙げて曰わく、禰処士、今日用て賓を娛しむる無し。窃かに以んみるに、此の鳥遠き自り至る。明慧聰善にして、羽族の貴ぶ可きものなり。願わくは先生之が賦を為り、四坐をして咸共に榮觀せしめよ。亦可ならずやと。衡因りて賦を為る。筆は停綴せず、文点を加えず、其の辞に曰わく、(以下略)

(時に黃祖の太子黃射は、賓客と大いに会した。ある人が鸚鵡を献上し、酒杯を私、禰衡の前に捧げて言った。「禰処士よ、今日の宴には、客人を榮しませる趣向も有りません。私の考えますところ、この鳥は遠くからもたらされ、優れた知恵を持ち、鳥の中でも貴重なものです。できることなら先生に鸚鵡の賦を作っていただき、我々満座の者に、賦を拝見するという榮譽を分かち与えていただければ、結構なことではないでしょうか」と。そこで私は賦を作った。筆は動きを止めることなく、一字の修正も施さなかった。)

右に挙げたのは「鸚鵡の賦」の序文であるが、今井佳子編『文選』(賦篇二)には、「鸚鵡の賦」の本文について次の指摘がある。

「鸚鵡賦」は、黃祖、黃射の下にいた時の作である。「西域の靈鳥」である鸚鵡だが、聡明で言語をしゃべれる才能のために、人間に捉えられ故郷から引き離される。籠の中で自由のない身を歎き、望郷の思いに駆られる。鸚鵡そのものの描写よりも鸚鵡の悲嘆の情が切々と書かれており、

禰衡自身の愁いが強く鸚鵡に投影されている。鳥に自らを投影しながら描く賦は、これ以降、張華の「鷓鴣賦」や鮑照の「舞鶴賦」等があり、「鸚鵡賦」の影響が考えられる。<sup>16)</sup>

「鸚鵡賦」には、今井氏の指摘にあるように、言葉を真似ることや美しい姿から珍重され、王侯貴族に献上された鸚鵡の葛藤や歎きが、鸚鵡の視点から描かれている。そして、注目されるのは、鸚鵡の次のような心境である。故郷(西域)への帰心は止みがたい。主人に仕えているが、必ずしも籠の中で才能を思うままに伸ばすことはできないでいる。しかしすでに羽を切られ、また主人の恩顧を長く蒙っている上は、主人のために命を賭して使命を果たそうというのである。これは、黃祖・黃射の下に仕えながら、不遇な思いを懐いていた禰衡が、その憂愁を鸚鵡に投影したと考えられる。

また、この禰衡の「鸚鵡賦」については、塚本信也「鳥と網のアナロジ―顔延之「庭誥」への一視点―」<sup>17)</sup>に興味深い指摘がある。同論文では、「庭誥」に見えるアナロジを考察し、様々な文学や文章における鳥と網との相関について取り上げている。そして次のような二つの系譜があると分析する。

網Ⅱ徳、統治者(狩獵者)、ヒーロー 鳥Ⅱ被捕獲者、賢者  
網Ⅱ法、桎梏、アンチヒーロー 鳥Ⅱ被捕獲者、ヒーロー  
さらに次のような指摘も見える。

例えば、先の「一目の網」句を用いた禰衡「鸚鵡賦」も、この系譜から基本的に逸脱してはいない様に思う。  
跨崑崙而播弋、冠雲霓而張羅、雖網維之備設、終一目之所加、

遠く崑崙の彼方までいくるみを放ち、遙か天に届かんばかりの網を仕掛け、あらん限りの大包圍網に拘わらず、西域の靈鳥は網の極々一目に、太子様の掌中に落ちました。「鸚鵡賦」など先行の作品に顕著な哲理も作中ではほとんど背景に退き、最後は「隆恩を既往に待み、彌々久しく滄わらざるを慮う」と太子を称えて作品を結んでいる。

この作品で、太子黄射を称賛している禰衡であるが、剛傲な性格が禍し、この後、黄射の父黄祖に殺害されるに至る。塚田氏は、先行論文<sup>88</sup>によりつつ、「この頃、「人間の悪意への深刻な恐れが籠められている」「網羅のイメージ」の増幅と浸透は、一つのピークを迎えていた。」と指摘している。

つまり、禰衡「鸚鵡の賦」の場合は、網は統治者⇨捕獲者、黄射であり、鸚鵡は被捕獲者、禰衡となる。禰衡は、捕獲者、黄射の徳を称え、その黄射により己の才能を評価されて抱えられ、仕えていることに感謝している。一方、羽を切られ籠に閉じ込められ、自由に飛びまわることのかなわない不自由、不遇を嘆いているのである。当時、禰衡が置かれていた境遇を推し量れば（文才には秀でながらも不羈な言動のため、曹操から、劉表へ、劉表から黄祖へ送られていた）、この賦での鸚鵡の重層的な表現は、一杯の統治者への抵抗であっただろう。

では、杜甫の「鸚鵡」はどのように解釈できるのであろうか。先述の④では、自身に優れた才能があれば、本来鸚鵡のように天子⇨捕獲者に捕えられるべきである。実際旧友は朝廷に抜擢されているが、作者自身は都から遠い秦州（鸚鵡の産地である）において評価されず、朝廷に用いられずにいる。いわば無用と見なされている自身を鸚鵡に託し、推挙を求めていると読める。

これに対して、「鸚鵡」詩は、禰衡の「鸚鵡の賦」の表現をかなり踏まえている<sup>89</sup>が、実際は杜甫が故郷（都の近郊）から遠く離れ、異郷の地で不遇な状況にあることを鸚鵡に託して表出したものである。なぜ、杜甫は鸚鵡に自身を託したのか。それは、先ほど禰衡「鸚鵡の賦」の序文についてすでに考察したところと重なる。鸚鵡は言葉を真似る聡明さや羽の美しさから、西域で捕獲され、皇帝や王侯貴族に献上されて、故郷から遠い都で籠の中に飼われ、愛好・珍重される。先の白鸚鵡のエピソードにも見られるように、一つには言葉を真似る聡明さにおいて、二つには王侯貴族に珍重・愛好される点において、詩人の境遇を託すのにふさわしかったと考えられる。唐代にあって、詩人は皇帝の臣下、つまり官僚となつて、職務に務める一方、詩を制作する場合は多か

った（王侯貴族の庇護を受ける場合もまれにはあったが）。杜甫は仕官を常に希望しながら、官僚として活躍した時期は限られる。この詩の制作時期には、杜甫は長江中流域の夔州に旅寓していてもちろん中央の官僚ではない。ただし、名誉職（檢校工部員外郎）として俸給を得ていたと想像される。この詩の「鸚鵡」の場合は、先の例の構図とは逆に、捕獲者⇨皇帝や王侯貴族に捕えられる鸚鵡の悲哀を詠じている。故郷から切り離され、籠の中に拘束され、老いてなお不自由な身の上にある憂愁を、杜甫は鸚鵡に託しているのであろう。つまり、④とは、捕獲者の位置づけが逆転している。杜甫はこの時、すでに老境にさしかかり、なおも遠く故郷を離れている寂寥の心象を託そうとした。さらには、従来の捕獲者⇨有徳の執政者（皇帝）に仕官を望む、という考えを覆している。つまり、捕獲者⇨不徳の為政者、アンチヒーローとして捉え、被捕獲者である鸚鵡に、婉曲ながら政治に係る危険性を託したと考えられる<sup>90</sup>。禰衡の「鸚鵡の賦」においてはまだ潜在的であった政権への批判を顕在化させた表現であると言えよう。

## 第二章 「鷓鴣」

次に本章では、鷓鴣について考察してゆくこととする。「鷓鴣」は、昆虫などを食べるミソサザイのことであり、林の中で美声で鳴く、中国や日本では最小の鳥である。「鷓鴣」は、杜甫の詩に二例見える。

一つ目の例は、「秦州雜詩二十首 其の二十」に見える。この詩の制作には、次のような背景があり、それを踏まえて詩を理解する必要があると考える。

安史の乱が引き続き、唐王朝が揺らいでいた乾元二年（七五八）、杜甫は華州司功參軍の職を辞して秦州へと旅立った。秦州は、都長安から見ると西方の吐蕃との国境に接する辺境の町である。若い頃から、皇帝を補佐して天下を良くしたいとの高邁な志を抱いてきた杜甫ではあったが、肅宗皇帝によって排斥された房琯一派に繋がる人物として左遷されてからは、志は打ち砕かれ、

挫折感を抱いていた。華州司功參軍を辞した理由は明確ではないが、長安一帯が飢饉にみまわれたこと、肅宗に排斥されていること、さらには、恐らく杜甫が制作した「三更三別」詩において、当時の政権の政策批判を行なったとみなされたことなどに起因すると思われる。

さて、その旅先の地秦州で制作した「秦州雜詩二十首」は、秦州時代の詩を代表する作品の一つである。秦州で目にした情景、それは杜甫にとってその感性をいやがうえにも刺激し、辺境の蕭条たる景色、西域の諸国、特に吐蕃との緊迫した情勢や雰囲気を尖鋭な表現に捉えている。この詩の特徴については、吉川幸次郎の「秦州の杜甫」<sup>21)</sup>や鈴木修次「秦州時代の杜甫の詩」<sup>22)</sup>などの優れた論考がある。また、論者も「秦州雜詩二十首」における詠懐と叙景<sup>23)</sup>において、「秦州雜詩」という詩題の意味を考察した。

「秦州雜詩」という詩題そのものがある種矛盾を内包しているように見えるが、実は杜甫の意欲的な一つの新しい試みであると考えられることを指摘した。杜甫は、「秦州」という地名を詩題に冠したことに象徴される具体的事象に即した叙事・叙景と、「雜詩」(伝統的に「詠懐」の流れを汲む文学様式)という具象を脱した抽象的思想、すなわち詠懐との間で、往復を繰り返す様式をここで新たに編み出しているとしたのである。その上で、「抽象的詠懐と具象的な叙景が交錯し、拮抗する構成を持つ、―それがまた現実を直視する中で、自らの感性を研ぎ澄まし進むべき道への模索を深め、新たな可能性へと自己を開こうとしている―」とこの連作詩の特徴について論じたのである。

この「秦州雜詩二十首」の第二十首に、「鷓鴣」が詠じられている。

秦州雜詩二十首 其二十 秦州雜詩二十首 其の二十

杜甫

唐堯真自聖 唐堯 真に自づから聖なり  
野老復何知 野老 復た何をか知らん  
曬藥能無婦 薬を曬すには能く婦無からんや  
応門幸有児 門に應ずるには幸ひに児有り

藏書聞禹穴 書を蔵するには禹穴を聞き  
読記憶仇池 記を読んでは仇池を憶ふ  
為報駕行旧 為に報ぜよ駕行の旧に  
鷓鴣在一枝 鷓鴣は一枝に在りと

(『詳註』卷七)

古の聖天子堯帝にも比すべきわが肅宗皇帝はまことに生まれながらの聖人であられる。

私のようないなかおやじが政治について何を知らるか、あれこれ申し上げることはない。

暮らしのために薬草を日にさらすのには妻がいることだし、客の応対には幸い子どもがいる。

近くには夏の禹王が書物を蔵したという禹穴があると聞いているし、また地理書を読んでは仇池という景勝地に行ってみたいと思う。

私のために朝廷にいる旧友たちに伝えてほしい。みそさざいは林の中の一枝に身を寄せて満足している(そのように私は秦州での生活に満足している)と。

首聯では、肅宗を古代の聖天子堯(唐堯)になぞらえ、そのように本当に聖なる存在であると称揚し、その肅宗に対して、自分のような「野老」、一介のいなか老人がその治世に付け加える何事も知るはずがないと謙遜している。「真に自づから」というところには、単に謙遜にとどまらず、「本来そうであるはずだ」という少々非難めいた感情が内包されているようにも思われる。

領聯では、秦州での貧窮ながら自適した生活を述べる。官を退き、報酬がない中、山野で薬を採り、それを売って生業にしているのであり、それを妻が手伝っていることに言及している。また、今や在野の杜甫に客は在京の時に比べれば多くはないであろうが、客の応対には子どもがおり困ることもないという。貧しいながらも家族が寄り添い、助け合って暮らす様子が浮かび上がる。

頸聯は、新たな土地での楽しみについて述べる。かねてから書物や人からの伝聞によって憧れていた「仇池」や「禹穴」など、伝説的な景勝地や名所を訪問する希望を語っている。「仇池」「禹穴」とも遠方であることから、実際に訪れる希望があったとは考えにくい。秦州の地から想像をさせていると理解できよう。

尾聯の「駕行」は朝廷に居並ぶ文官の行列、「駕鸞行」のこと。「駕鸞」は、朝廷の高官、「行」は行列をいう。ここでは、『詳註』（卷之七）に指摘されているように、「駕行の侶とは、同朝の旧友を指す」（駕行侶、指同朝旧友）。つまり、かつて杜甫と同僚であった官僚たちは、朝廷に居並んでいることであろうと想像している。そして、その下の句に、「鷓鴣は一枝に在り」と「鷓鴣」が現れる。この句は、『詳註』が指摘するように、『莊子』逍遙遊篇に「鷓鴣は深林に巢くふも、一枝に過ぎず」とあるのを踏まえる。逍遙遊篇の冒頭には、鵬という巨大な鳥が世俗から超越した理想の存在として描かれるが、それに対して小さなミソサザイは深い林に巢をつくり、ただ一本の枝に巢を作って満足することをいう<sup>④</sup>。ここでは、秦州での生活は貧しいながら、心安らかに満足できるものであることを詠じている。この二句では、次の二つが対比されている。

「駕行」 高貴、朝廷—中央

「鷓鴣」 弱小、深林—辺境（周縁）

右のように「駕行」「鷓鴣」の対比を分析することができる。「鷓鴣」は、朝廷に連なることはない存在である。深い林の中で、ただ一枝に身を寄せ、美しい鳴き声を響かせ、自由に飛び回りながら、自適する存在である。恐らく、杜甫が「鷓鴣」に託したのは、朝廷を離れ、自適している、あるいは自適し、隠棲することを希望している自身の姿である。

ただ、『詳註』が、「自ら聖なりとは、謙言（正しいことは、正しい議論）を入れる能はざるを見はす。何ぞ知らんとは、朝政を聞くに忍びざるを見はす」と注していることを踏まえると、次のようにも考えられる。詩の冒頭で肅宗を「真に自づから聖なり」と称揚しているにもかかわらず、その聖であるはずの肅宗の政策に

対して、杜甫は失望し不満を懐いていたと思われる。このことから、「鷓鴣は一枝に在り」の句も、先のように文字通りに読むだけでは十分ではないだろう。杜甫自身には、この秦州での生活に自適・自得し、この地に隠棲しようとする気持ちももちろんあったであろう。しかし、実はかつてともに朝廷に列していた官僚達に、自分の政治上の正しい発言・議論を理解してほしい、あるいは今自分は自適して退隠しているが、中央の官僚として再び活躍できるように抜擢してほしい、との微かな願いも同時にあったのではない。中央の朝廷で活躍し、政治に貢献したいという志を依然断ち切り難く、それでもここで断たなければならぬと思いついて、敢えて今の生活に満足していると同僚に伝えようとした可能性もあるのではないだろうか。

いずれにしろ「鷓鴣は一枝に在り」は、まさに「鷓鴣」という小鳥に、退隠生活を送る杜甫自身の生き方を託した表現であることには違いない。

杜甫の「鷓鴣」の例をもう一つ次にあげる。

流年疲蟋蟀 流年 蟋蟀に疲れ  
體物幸鷓鴣 體物 幸ひに鷓鴣たり

（『詳註』卷二十二「奉贈盧五丈參謀」）

ここでも、「鷓鴣」は、やはり『莊子』逍遙遊の「鷓鴣」に在り」の典故を踏まえ、今、世の中から用いられず退隠し、幸い何とか自適している自身を託したものである。「鷓鴣」と対をなす「蟋蟀」は、こおろぎ、またはきりぎりすで、秋の到来を告げる虫である<sup>⑤</sup>。ここでは、「蟋蟀疲」といい、人生の晩年を迎えて、墮ちぶれている状態を象徴している。

このように杜甫は、その人生に向き合わざるを得ない時に、鷓鴣にわが身を託して詠じていることがわかる。

「秦州雜詩二十首」は、幾たびもの政治や人生における挫折を経た後に詠じられたものであるが、その時、わが身を託す鳥は猛禽の「鷹」ではなく、いわばそれと対照的な最小の鳥「鷓鴣」へと変貌を遂げている。

「画鷹」などの作品において、若い時代、杜甫が「鷹」に託し

たのは、官僚として政治を変革したいという志を絶対のもの、最上のものと信じ、疑うことを知らない直截的な志望ゆえであった。それに対して、この時の杜甫は、「鷓鴣」という小鳥にわが身を託し、しかも、「一枝」というささやかな、しかも都から遠く離れた場所を身を託す場所として捉えるに至っている。その小さいながらも懸命に生きる姿は、どこかすがすがしいものと映る。世界の中で自分の居場所として、いわば儒家的な榮譽・名利からは遠く、しかし莊子的な自由で世の中から一步距離をおいた境涯に人生の意義を見出していた。右の「鷓鴣」の二例は、いわば杜甫が、儒家的な価値観に疑義をほさみ、社会における自身の存在を大きな視点で謙虚に捉え始めていたことを物語るものだろう。

### 第三章 まとめ

これまで、杜甫の「鸚鵡」「鷓鴣」の例について、杜甫がどのようなイメージを託しているのかを考察してきた。第一章では「鸚鵡」の例について検討した。その結果、鸚鵡には一つには、唐王朝の華やかな朝廷文化の象徴というイメージがある。さらに注目されるのは、西域から捕獲され、故郷を遠く離れた都で、籠の中で過ごす鸚鵡に、皇帝の恩寵を受ける榮譽を見る場合である。④「秦州見敕目、薛三璩授司議郎、畢四曜除監察、与二子有故、遠喜遷官、兼述索居凡三十韻」では、杜甫は都での鸚鵡のように、恩寵を受ける仕官を望みながら、それはかなわず無用扱いをされる自身を、隴（秦州）の鸚鵡に託していた。一方、「鸚鵡」詩での鸚鵡は、捕獲されて故郷に帰郷できず、才能を活かす機会もなく虚しく憔悴している。その自由を奪われた境遇に、悲哀と憂愁を見ていると解釈できる。この場合、杜甫は異郷にあって帰郷できず、老境にあって朝廷から僅かな俸給を受ける自身の境遇を託していると思われる。この鸚鵡は、従来の例とは全く意味が逆転している。つまり、開元・天宝年間に、その美しさと才能を珍重され、皇帝や王侯貴族など執政者に愛好された鸚鵡であったが、安史の乱を経て、ここでの鸚鵡は憔悴し、才能を活かす機会を与

えられず、束縛され、何のための才能であったのかと疑問を突きつけているのである。すなわち、執政者Ⅱ有徳の構図が崩壊していることは明白である。

第二章では、「鷓鴣」の例について検討した。杜甫の詩に、鷓鴣は二例見える。いずれも『莊子』逍遙遊篇の故事を踏まえ、深い林の一枝に自適する鷓鴣の姿に自身の退隱し、世の中の榮譽や名利から解放され、自由に暮らす心境を託している。そこには、すでに先行論文に指摘されているように、魏晋の詩賦や晋・郭象の『莊子』解釈において、小鳥の価値が見直されたことが大きく影響している。また、都の高級官僚に自身を対置して捉えていることを、ことさら物語るものでもあった。つまり、むしろ小鳥ではあるが、捕獲者に愛好されることを望まず、深林にあって、美声を響かせる自適した鷓鴣の存在に、杜甫はひとときわ心惹かれていったといえよう。

かつて若い頃に猛禽の鷹に自身の壮志を託していた杜甫が、華州司功參軍を退職して以後、自身と等身大の「鷓鴣」という小鳥に擬えたことは、詩人としての成熟であっただろう。つまり、ありたい理想の姿を歌い上げるのではなく、自身の姿を外部から客体化し、客観的に捉える視点を一層明確に獲得した証であると考えられるのである。

拙稿では、杜甫の多くの鳥の中から、「鸚鵡」と「鷓鴣」について取り上げて、考察してきた。今後、やはり自身を託した表現の見える「鷓鴣」の場合についても考察してゆきたい。

### 【注】

- (1) 川合康三「杜甫のまわりの小さな生き物たち」(『生誕千三百年記念 杜甫研究論集』、二〇一三年九月、中国詩文研究会編、研文出版)では、「杜甫が身近な小動物の描出にとりわけ熱心なのは、成都の浣花草堂にいた時期に集中している」とし、「詩の中の蟲や鳥が寓意的な意味を負わされることなく、単に外界の一部としてのみ存在していることであ

った。そのところが従来の詩と大きく異なる。杜甫以前の詩のなかでは、小動物も人が与えた意味を帯びることによって詩のなかに用いられたのである。それに対して、ここまで見てきた杜甫の詩のなかの小さな生き物たち―「蜻蜓・鸚鵡」「魚兒・燕子」「燕・鷗」「蛺蝶・蜻蛉」には固定した意味づけがない。」と指摘している。

(2) 『中国文学報』十七号、中国文学会（京都大学）、一九六二年十月

(3) 『日本文学誌要』五十一号、法政大学、一九九五年三月

(4) 『札幌国語研究』第十五号、北海道教育大学札幌校、二〇一〇年

(5) 據宋紹興本点校・明本補欠排印、汪紹楹校、中文出版社、一九八〇年十二月

(6) 唐・徐堅輯、京華出版社、二〇〇〇年五月

(7) 『二松学舎大学人文論叢』十七号、二松学舎大学人文学会、一九八〇年

(8) 『杜甫引得』哈佛燕京学社引得特刊十四、燕京大学貝公樓、一九六六年

(9) 植木久行著『唐詩の風景』（講談社学術文庫、講談社、一九九九年四月）第一部（一）「長安―花は舞う 大唐の春―」の「紫閣峰」の項に、「圭峰山の東には、隱棲地として名高い紫閣峰があった。（中略）三峰（紫閣・白閣・黄閣）の中でも紫閣峰は、紫煙たなびく仙境を連想させ、神仙や道士・隱者の住居にふさわしい。」と述べ、「漢陂」の項では「都長安の西南郊外、鄠（戸）（鄠）のなかに、周回十四里（七キロ強）の大きな池「漢陂」があった（譚其驥『中国歴史地図集』第五冊）。漢陂は「美陂」とも書く（『元和郡県志』卷二）。この池は、今日もなお戸県城（甘亭鎮）の西約二キロの陂頭村（西安市の西南約四十キロ）に、小さな「漢陂湖」として現存する」とある。さらに、「漢陂は、終南山の諸谷から流れ出る清澄な水を豊かにたたえ、水鳥が菱や蓮の間をぬって楽しげに泳ぎ、青い瑠璃色をした水面

の南には、終南山の峰々（紫閣峰・白閣峰）が、濃い陰をくつきりと落としていた。漢陂の詩跡化は、杜甫の詩に始まった。杜甫は天寶十三年（七五四）、四十三歳のとき、好奇心旺盛な友人岑参兄弟に誘われて「波濤万頃」のこの池を訪れて舟遊びをし、「漢陂の行」を作った。」と指摘している。

(10) 開元中、嶺南獻白鸚鵡、養之宮中、歲久、頗聰慧、洞曉言詞。上及貴妃皆呼為雪衣女。性既馴擾、常縱其飲啄飛鳴、然亦不離屏幃間。上令以近代詞臣詩篇授之、數遍便可諷誦。上每与貴妃及諸王博戲、上稍不勝、左右呼雪衣娘、必飛入局中鼓舞、以乱其行列、或啄嬪御及諸王手、使不能爭道。忽一日、飛上貴妃鏡台、語曰、「雪衣娘昨夜夢為鸚鳥所搏、将尽於此乎」。上使貴妃授以多心經、記誦頗精熟、日夜不息、若懼禍難、有所禳者。上与貴妃出於別殿、貴妃置雪衣娘于步輦竿上、与之同去。既至、上命從官校獵於殿下、鸚鵡方戲於殿上、忽有鷹搏之而斃。上与貴妃歎息久之、遂命瘞于苑中、為立塚、呼為鸚鵡塚。（唐宋資料筆記叢刊『明皇雜錄東觀奏記』中華書局、一九九四年）

(11) 『新唐書』卷二二下、西域伝下（康国伝）に、「康なる者は、一に薩末韃（サマルカンド）と曰ひ、亦た颯末建と曰ふ。貞觀の時、歲に金桃、銀桃を入貢す。詔にて苑中に植ゑ令む。」とある。

(12) 『正倉院への道―天平の至宝』米田雄介・児島建次郎著、雄山閣出版、一九九九年十月

(13) 『詳註』卷十七の「鸚鵡」の仇兆鰲の注に「此下八章、乃雜詠物類、蓋即所見以寓意也。」（此の下八章、乃ち物類を雜詠す。蓋し見る所に即して以て意を寓するなり）とあり、黄鶴注に「此詩句句含不遇之意、蓋託以自況。」（此の詩句句不遇の意を含む。蓋し託するに自らの況を以てす）とある。

(14) 新釈漢文大系『礼記 上』竹内照夫著、明治書院、昭和四十七年四月

- (15) 新書漢文大系『文選 賦篇二』、高橋忠彦著・今井佳子編、明治書院、平成十六年六月
- (16) 注(15)に同じ。
- (17) 『中国文人の思考と表現』、村上哲見先生古稀記念論文集刊行委員会編、平成十三年七月
- (18) 興膳宏「嵇康の飛翔」、『中国文学報』十六、一九六二年四月
- (19) 朱鶴齡の注に「此の詩は禰衡賦中の語を櫛括するに似たり。聰明ならば則ち「性は慧弁にして能く言ひ、才は聰明にして以て機を識る」なり。別離ならば則ち「母子の長く隔てらるるを痛み、伉儷の生きながら離るるを哀しむ」也。」(以下略)とあり、禰衡の「鸚鵡賦」を踏まえ、それを敷衍していると指摘している。
- (20) 『詳註』引く顧宸の注に「此れ才人の路を失ひ、身を異族に託するの感有るは分明にして、魏武の楊修における、隋煬の薛道衡におけるが如く、皆所謂「復た損なわるるを憐れむ」なり。」とある。後漢末の楊修は、曹操の主簿として仕え、よく隠語を解したが、後曹操に忌まれて誣殺された人物であり、隋の薛道衡は隋文帝の時に、上開府を務め、顯官であったが、煬帝が即位した際、「文皇帝の頌」(文皇帝をほめたたえる文)を献じたところ、不興を買い、自尽を命じられた人物。いずれも、権力者に一度は重用されたが、後に文学の才が禍して殺害された。あるいはこの「鸚鵡」を杜甫が作った際、杜甫自身、あるいは杜甫が共感を寄せている詩人が、筆禍などを蒙る危険があったのかもしれない。
- (21) 『吉川幸次郎全集 第十二卷』所収。吉川幸次郎著、筑摩書房、一九六八年六月初版、一九九八年九月第五刷
- (22) 『唐代詩人論 下』鈴木修次著、鳳出版、昭和四十八年四月
- (23) 『新しい漢字漢文教育』第四十九号、全国漢文教育学会、平成二十一年十一月
- (24) 興膳宏「小鳥の飛翔―阮籍・張華から郭象へ―」(『松浦友久博士追悼記念中国古典文学論集』研文出版、二〇〇六年三月、松浦友久博士追悼記念中国古典文学論集刊行会編)では、阮籍の書簡に見える小鳥のイメージを用いた比喻を通して、『莊子』のテキストに関する魏晉人の理解の問題を考察している。そこに次のような指摘がある。
- 阮籍の思索は、真実を求める思索者と現実を生きる生活者との相克を示すかのように、鵬と学鳩の間で揺れつづけているが、しかし本来の『莊子』的な鵬への一方的な傾倒はもはやなく、学鳩の立場にもそれなりに理解を示す。その後を受けた張華「鷓鴣賦」では、阮籍よりもいっそう生活者としての観点から、「鷓鴣」に代表される小鳥の立場への理解が深められる。郭象の『莊子』理解は、先達の注釈に対して払われた関心とともに、直接的に『莊子』のテキストに関わらない魏晉の文学作品からの影響によって形成されたという一面が必ずやあるに違いない。
- (25) 『詳註』(卷二十二)は、同詩の「蟋蟀」について次のように注している。
- 『詩(経)』に「蟋蟀堂に在り、歳聿に其れ暮る」とある。古詩に「晨風 苦心を懐き、蟋蟀 局促を傷む」とある。
- (長野県短期大学 多文化コミュニケーション学科 日本語日本文化専攻  
(連絡先 〒380-8525 長野県長野市三輪8-49-7)  
(平成28年4月4日受付、平成28年5月23日受理)